

浄土学専攻

浄土教への現代的要請

腹 間 恵 弘

浄土教は念仏を以て主体としての阿弥陀仏を称名し、讃嘆供養する事によつて仏国土に往生する事を宗旨としている。思索にたけた印度に発し、支那に於て信仰形態をなし、日本に於て一宗派として建立され極めて独創的な内容を持つに至つた。南無阿弥陀仏という宗教思想の発見は、人類史上に多大なる寄与をなし、古来より何億の魂が救済されたであろうか。それは宗教思想の極致とも云うべきものである。鎌倉時代に於ける新興宗教として、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗、親鸞の真宗、一遍の時宗、法然の浄土宗と六宗が興起したが、自らの宗教体験によつて念仏一乗の法門を樹立した法然上人ほど画期的な宗教革命をなした宗教者はない。その革新は仏教を民衆と生活に結びつけた点であり、貴

頭縉紳、又は武家階級より一般庶民の間にまで念仏思想を浸透させた点である。日本に渡来した仏教で日本で育成された宗派中、浄土宗ほど最も日本的なものはない。現代、浄土教団に欠如されているものは何か。それは法然上人の金剛不壞な信念と、時代人心を把握する明敏性、社会民衆を南無阿弥陀仏に摂化する同化力に乏しい事である。第二次世界大戦後、新興宗教抬頭に際しても、他山の石視して施策編るべきものなく以て非なる新宗教の喫梁にまかせて既成宗教は、もはや過去の遺物にして現代大衆の救済に能力なく、自壞作用をなしつつありども批判されている。浄土宗も十六年振りにて合同の機会をえたがその間、法廷にまでその醜態を晒し徒らに社会の鑿窟を招き、宗教本来の和合体を省みず、その歳月の空白は宗門にとつて多大なる損失であるばかりでなく信者をも混乱に導き信教の面にも障害を来たしたのである。ここに新興宗教というは、日蓮宗系にては靈友会、創価学会等であり、又はP.L教団、世界救世教等は全国的に組織をもちその行動力は既成仏教諸宗をこえつゝある。

新宗教の共通点は皆、教理の習合的性格と現世利益中心主義である。特に創価学会の如きは、ほろびゆく邪教、念仏なる論説を挙げて鋭く非難攻撃し、その論旨は激越を濟めた。浄土教が今や現実的な機能を問われる段階に達した。草木国土悉有仏性の文を引くまでもなく、仏教の教化はあらゆるものを摂化抱擁するところに意義がある。特に浄土教にとつては共存共栄、共生極楽成仏道を行じている。社会に於ける共存共栄を發展させて、無量寿、無量光の永生にまで昇華させてきたのである。邪教念仏と極論するに至つては反論せざるを得ぬ。

日蓮が法華を説くにあたりては天台をつぎ、祈禱を重んずるに際しては、日蓮自ら真言亡国と罵る真言に接し、題目を唱えるには念仏無間の浄土の称名に影響をうけ、その末法思想に至つては厭離穢土の浄土観につながるものである。こゝに於て、浄土教への現代的要請と念仏イデオロギーの現代的価値に論及せんとするものである。浄土教理よりこれをのべれば法蔵菩薩の六・八の願の中、王本願とよばれる第十八願を挙げる事が出来る。願は一

つであるがこれは双卷經の上巻下巻に現れている。

説、我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生れんと欲して乃至十念せんに、若し生れずんば、正覚を取らじ。

諸有の衆生、その名号を聞きて、信心歡喜し、乃至一念し、至心に廻向して彼の国に生れんと願すれば、即ち往生をえて、不退転に住す。(1)

善導大師は觀經疏にそれを釈して、

もし我れ仏と成らんに、十方の衆生、我が名号を稱ふること、下十声に至るまで、若し生ぜずば正覚を取らじと、彼の仏、今現に世に在して成仏したまへり。当に知るべし、本誓の重願、虚しからざることを。衆生称念すれば、必ず往生を得。と、

法然上人は浄土宗略抄に、

もしわれほとけにならんに、十方の衆生、わがくに、うまれんとねがひて、わが名号をとらふる事、下十声にいたるまで、わが願力に乗じて、もし生まれずば、われほとけにならじ(2)。

この念仏往生の願文は凡夫往生の願であり、従つて五濁悪世、即ち末法の現代に於て罪ある者、愚なる者、汚れたる者、邪なる者等の充滿する現実にとつて救済の宗教であり、念仏こそは現代の苦の衆生に対して必順不可欠なる信仰と云わねばならない。更に四十八願のうちの一願に、

たとひわれ、仏を得たらんに、国の中の人天、形色同じからずして、好醜あらば、正覺をとらじ。

この無有好醜の願文は、善悪、凡愚の差別の彼岸に念仏の一門が立つと共に、美醜の彼岸に芸術の浄土のある事を示している。こゝに於てか浄土教は念仏宗は、広く一切の文化の中にあるといえる事が出来る。そして末世末法なればこそ、厭離穢土、欣求浄土の信仰を必要とするものではなからうか。念仏は邪教でもなく呪文でもなく、況んや過去の遺物でもなく、末法の現代にこそ衆生救済の指針となるべきものである。しかし現代の日本民族が精神的に何か欠けていると云うのは何か。それは宗教心であると断じる事が出来る。かゝる末法の時代に精

仏教工学研究室報

38-40

神の拠点となる仏教は他力門であり、弥陀の本願力であることは言うまでもない。応に浄土門発展興隆の世代を迎えた。こゝで現代、浄土教団を展望して願慮する点は將して、激動混迷の嵐の中にある現代に処して、而も新興宗教のあくなき攻勢に対して、挙宗一致、道俗、協力協心、身命を賭してまでの不動の信念ありや、に就ては、深く反省を要するものである。

註①法然上人全集「無量寿経釈」頁一五五、六

②法然上人全集「浄土宗略抄」頁八八

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。